

カトリシズムとは何か — 詩人の視点から —

飯 田 純 也

カトリシズムとは何か。カトリックは字義的には普遍的を意味している。しかし周知のごとく、キリスト教の歴史はスキズムの歴史であった。分裂、対立、暴力が普遍性の主張を制約してきたのである。ここでは詩人の視点からカトリシズムを考える。詩人の視点とは内面性を問う視点のことである。カトリシズムの源泉は聖書であるが、先ず聖書の中の比喩を使い、問題設定を行いたい。

聖書の中の 2 つの譬え話

詩人は比喩を使う。比喩を使うと、見えないものが見えてくる。聖書の中では、イエスが詩人のように比喩を使い、死後の魂の世界を明かす。見えない死者の世界が、イエスの比喩によって見えてくる。それはどのような世界であろうか。イエスの譬え話の中には 2 つの対照的比喩がある。

タラントの比喩¹

天国は、旅に出る主人がしもべを呼び、財産を預けるのにたとえられる。主人は、しもべの能力に応じ、ひとりには 5 タラント、ひとりには 2 タラント、もうひとりには 1 タラントを預けた。5 タラントのしもべは 5 タラントを資本に商売を営み、さらに 5 タラント儲けた。2 タラントのしもべも同じように商売を営み、さらに 2 タラント儲けた。しかし、1 タラントのしもべだけは、預かった金を地面に掘った穴の中に隠した。

さて、主人が旅から帰り、3 人のしもべに預けた財産の清算をはじめた。5 タラント儲けたしもべが報告を行うと、主人は、「よくやった。おまえは私の信頼に答えた。おまえにはたくさんの物を儲け、喜びを分かち合おうではないか」と答えた。2 タラント儲けたしもべの報告にも同じように答えた。

しかし、1 タラント預かったしもべが、「あなたは、種を蒔かなかった場所から収穫を取

1. マタイ福音書 25 章 14-30 節。

り立てる厳しい方です。だから私は怖くなり、あなたから預かった1タラントを地面の下に隠しておきました」と報告すると、主人は「おまえはなまけものの悪党だ。私が種を蒔かなかった場所から収穫すると言うのであれば、おまえはお金を銀行に預けるべきだった。銀行に預けておけば、利子とともに返金できた。しかし、それさえしていなかった。預けた金を取り上げ、10タラント儲けた者にあげなさい」と答えた。主人はさらに続け、「持っている人はさらに与えられ、豊かになるが、持っていない人は、すべて取り上げられる。だから、この役立たずを、屋敷の外に追放しなさい」と述べた。

以上の警え話の要点をまとめると、①与えられた金の量は人によって違う。②金と同時に時間が与えられている。③与えられた時間内で与えられた金を資本に利益を得るのが善である。④与えられた金を活用しないのが悪である。⑤与えられた金を活用しないより、与えられた金を他人に預け、利息を得る方が善い。⑥利益を得る者は天国に迎えられ、利益を生まない者は闇の世界に追放される。

ブドウの木の比喻²

わたしはブドウの木である。わたしの父は農夫である。農夫は、実を結ばない枝を取り除き、実を結ぶ枝がさらに実を結ぶように刈り込む。わたしの中にとどまりなさい。わたしもあなたの中にとどまる。枝は木の中にとどまらなければ、実を結ぶことができない。あなたも、わたしの中にとどまっていなければ、実を結ぶことはできない。

わたしは木であり、あなたは枝である。あなたがわたしの中にとどまり、わたしもあなたの中にとどまるならば、あなたは豊かに実を結ぶ。わたしを離れて、あなたは何もできない。わたしの中にとどまらない人は誰であろうと、木から除かれ、枯れる。枯れた枝は集められ、火の中に投げ入れられ、焼かれてしまう。あなたがわたしの中にとどまり、わたしのことばがあなたの中にとどまり続けるなら、何でも願いなさい。あなたの願いはかなえられる。

以上の要点をまとめると、①木が与えられているが、②木とはキリストのことばである。③キリストのことばの中にとどまると、なんでも願うことがかなえられる。④木の中にとどまるのが生であり、木の中にとどまらないのが死である。⑤後者は前者から除かれ焼かれてしまう。

歴史か、自然か

では、これら2つの警え話を比較した上で、何が言えるのか。まず、これらは2つの異なる世界観であるということだ。タラントの警え話では、神は人間の時間にかかわるが、自

2. ヨハネ福音書15章1-5節。

ら登場するのは最後の審判の場面だけである。神は歴史的であるが、同時に超越的である。他方、ブドウの木の譬え話では、神は人間の時間に積極的にかかわる。何でも願いなさい。あなたの願いはかなえられる。神は人間の歴史及び自然に内在するのだ。タラントの譬え話では、価値観の基準は善と悪である。善悪は数値化、規範化、階級化される。善悪は社会的であるが、自然的であるとは言えない。他方、ブドウの木の譬え話では、価値観の基準が生と死である。生は有機的に結束する個と全体の関係である。個が全体の中にあり、全体が個の中にある。個と個の関係は平等である。個と全体をひとつにしているのが願望である。生死は自然的であり、理性より感情にかかわる。聖書の中にはこのように2つの世界観が混在しているのである。

ミルトン

詩人でタラントの比喩を好んで使ったのがプロテスタントの詩人 John Milton (1608-1674) である。彼はソネットやエピックの中でタラントの譬え話の背後にある世界を描き出している。タラントの比喩の背後にあるのは善悪の闘争である。旧約聖書の特にサミュエル記、イザヤ、エレミア等の予言書は神を「万軍の主」(“Lord of Hosts”)と呼ぶ。万軍は天使の軍隊を意味したり人間の軍隊を意味したりする。実際、*Paradise Lost* (1674) の中で、世界は善の天使と悪の天使が対決する戦場として描かれている。世界が戦場であれば、天使であれ、人間であれ、問われるのは戦士としてのタラントである。

天使ラファエルは天界の戦争の経過をアダムに説明する中で、天使アブデルの話をする。ヘブライ語の Abdiel は「神の僕」を意味する。アブデルは最初、サタンの軍隊に属する天使であったが、サタンが反逆の意志を明らかにすると、サタンに異議を唱えた。アブデルがサタンを離れ、神の陣営に加わると、神はタラントの譬え話の中の主人のごとく、“Servant of God, well done.” とアブデルを讃えたのである。

Servant of God, well done, well hast thou fought
The better fight, who single hast maintained
Against revolted multitudes the Cause
Of Truth, in word mightier then they in Armes. (*Paradise Lost*, 6, 29-32)

アブデルは与えられた弁論のタラントを活用した戦士として賞讃されている。アブデルのタラントは弁論ばかりではない。実際、ラファエルがアダムに語るところによると、アブデルは神の戦士としてサタンの軍勢と勇猛に戦った。ここにミルトンが考えるキリストの戦士の雛型がある³。

プロテスタントの天職

ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーは資本主義の精神をプロテスタントの職業意識に求める⁴。プロテスタントは仕事は何であれ、天職であるかのごとく仕事をするという⁵。仕事が金儲けのための金儲けになるのである。ヴェーバーは、ベンジャミン・フランクリンを基に、プロテスタントの職業観の合理性を強調する。しかし、プロテスタントの職業意識は必ずしも合理性の範囲に止まるわけではない⁶。ミルトンの場合のように、プロテスタントの天職は万軍の神に仕える戦士である。実際、フランクリンはどうであろうか。アメリカ独立戦争の文脈の中で、フランクリンは字義的に戦士ではなかったかもしれないが、精神的には戦士であった。彼の息子ウィリアムが敵にまわると、戦争終結後でさえ息子を許さなかった⁷。フランクリン親子、特にベンジャミンは最後まで戦士であり続けたのである。

タラントの譬え話のタラントが戦士のタラントであるとしたらどうであろうか。タラントを多く与えられている戦士が戦場を恐れることはないだろう。他方、タラントがわずかしか与えられていない戦士が戦場を恐れることはありえる。しかし神は、タラントがあまり与えられていない者でさえ、タラントを隠すことを許さない。神は最後の審判で臆病者のタラントを取り上げ、英雄たちにわけ与える。神は悪と戦い、勝利を得るため、敵と臆病者を徹底的に排除するのである。

神の戦士という原理主義的メンタリティは、キリスト教成立以降、歴史の節目に登場する。社会経済学はしばしば階級分析を行う。階級の構成が違えば、時代は違う。たとえばカトリックの十字軍とプロテスタントの宗教改革は時代が違う。しかし、神の戦士メンタリティは階級を超える。世俗化や他の社会変化の中、あるいは階級闘争の中、メンタリティそのものは変わらない。神の戦士メンタリティはカトリック、プロテスタントを問わないのである。

3. ミルトンはタラントの譬え話を踏まえ、ソネット *On His Blindness* で、タラントを隠すのは死を意味する (one talent which is death to hide) が、失明した自分にも他のタラントが残されているので、神の軍隊に仕えることができるとしている。

His state

Is kingly; thousands at his bidding speed

And post o'er land and ocean without rest:

They also serve who only stand and wait.

4. ヴェーバーが *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus* (1905) で展開する学説をそのまま受け入れることはできない。詳細は英語版の "Introduction by Anthony Giddens" (1976) に於けるアンソニー・ギデンズの解説を参照。

5. ヴェーバーの学説の最大の問題は天職 (英語では calling) の概念にある。彼は天職を宗教革命以後の、プロテスタント特有の概念であると定義する。 *The Protestant Ethics and the Spirit of Capitalism*, pp. xii, xxi-xxiii, 18ff.

6. 実際、ヴェーバー自身、天職の概念が潜在意識的であることを仄めかしている。 "Benjamin Franklin himself, although he was a colorless deist, answers in his autobiography with a quotation from the Bible, which his strict Calvinistic father drummed into him again and again in his youth: 'Seest thou a man diligent in business? He shall stand before kings' (Prov. Xxii. 29) (*Ibid*, p. 19)."

7. フランクリンの親子関係は、以下を参照。 Willard Sterne Randall, *A Little Revenge: Benjamin Franklin & His Son*.

ダンテ

中世ヨーロッパを代表する詩人 Dante Alighieri (1265-1321) が死者の世界を描くとき、彼はどのような比喩を使っているのか。ダンテの *The Divine Comedy* (c.1308-21) には、地獄があり、天国があり、両者の中間に煉獄がある。煉獄は最終的に天国に収斂される。だからダンテの世界は結局、善悪の二元論に基づくと言えそうである。しかし、実は、ダンテの死の世界は聖者及び生者のとりなしによって生成する世界である。ダンテの旅そのものがとりなしによって成立している。聖母マリアは、聖ルチアを通じて、聖ルチアはベアトリーチェを通じて、ダンテをあわれみ、天界のルールを破り、ダンテが死者の世界を旅することを許可したのである (*Inferno* 2, 94-114)。これがダンテの旅のはじまりである。

ダンテ論をはじめるにあたり、先ずジャック・ル・ゴフの煉獄研究を批判しなければならない。ル・ゴフは煉獄という単数の名詞の誕生をもって煉獄の誕生と考え、文献学的リサーチの結果、煉獄は12世紀後半のパリで生まれ、13世紀のスコラ学によって教義化されたとする⁸。

ル・ゴフの煉獄論の実体は実は資本主義論である⁹。ル・ゴフによれば、煉獄が生まれたから資本主義が生まれたのである。中世では、高利貸は罪であったが、煉獄の教義化により、貸金業者は自分が天国へ行けるかもしれないと考えるようになったという¹⁰。しかし、煉獄を視覚化するのに貢献したダンテは高利貸を地獄に入れている¹¹。いずれにせよ、神学や文学にかかわらず、貸金業の意義は社会的に十分認められていたのではなかったのか。

ル・ゴフは煉獄を精神的ではなく、歴史的であると見なす。煉獄が歴史的構築物であれば、中世が歴史的に失われれば、煉獄は中世とともに失われなければならない¹²。しかし、ダンテの煉獄の意義は精神的である¹³。歴史的なものは消えるが、精神的なものは消えないと考えるのが常識である。では、ダンテに則して、ル・ゴフの問題を設定し直そう。煉獄は名詞ではなく動詞の中で生まれたのである。煉獄の誕生は煉獄の父アウグスティヌスにさかのぼるだけではない。煉獄はキリスト教以前にさかのぼる。煉獄は死者の世界を場所ではなく状態と捉える感受性の中に起源を持っている。それがわからないとダンテの死者の世界がわからないのである。

8. Jacques Le Goff, *The Birth of Purgatory*, pp. 150, 159-60.

9. *Ibid.*, pp. 226-7.

10. *Ibid.*, pp. 303-6.

11. *Inferno* 11, 94-111; 17, 46-78.

12. カトリック教会はリンボの教義を見直しているが、ル・ゴフはイタリアの新聞のインタビューの中でリンボが消えるのであれば煉獄が消えるのも時間の問題であるとしている。煉獄が消えるのは、それが歴史的に限定されたものであるからだと主張する。“Le Goff: cancellato il Limbo adesso tocca al Purgatorio,” *Corriere della Sera*, December 19, 2005 (イタリア語)。

13. Ezra Pound, *The Spirit of Romance*, pp. 116-117 を参照。

とりなす

ダンテはとりなしによって救われるが、とりなしによって救われるのはダンテだけではない。とりなしのテーマはダンテの道案内を務めるウェルギリウスにかかわる。ダンテの救出をウェルギリウスに頼んだベアトリーチェは、異教徒のウェルギリウスを神にとりなすと約束する。

When I am before my Lord I will often praise you to Him. (2, 73-74)

ウェルギリウスは地獄の中のリンボに住んでいる。ダンテがリンボに立ち寄ると、ウェルギリウスはリンボの異教徒たちが「希望なく願望を生きるだけ」(4, 42)と嘆く。ある感情がダンテの中に生まれる。原文のイタリア語では“Gran duol” (Great sadness) (4, 43)とある。ダンテはベアトリーチェのようにウェルギリウスを神にとりなしたいと思ったのである。だから、ダンテはウェルギリウスにリンボの住人がとりなしによって天国に行った先例があるのか質問する(4, 46-51)。ウェルギリウスは、キリストが復活前に、リンボを訪れ、モーゼをはじめとする多くの人々を救出したとのみ答える(4, 53-63)。では、ウェルギリウスの魂はどうなるのか。この問いかけに対する解答が *The Divine Comedy* という作品である。ダンテは地獄、煉獄、天国を旅しながら、ウェルギリウスがとりなしによって救済可能であることを確信するのである¹⁴。

ウェルギリウスがとりなしによって天国に行くとするれば、ウェルギリウス以外のリンボの住人たちはどうであろうか。ダンテがとりなしたいと思っているリンボの住人はウェルギリウスだけであろうか。リンボにはキリスト以前の異教徒とキリスト以後の異教徒が住んでいる。キリスト以前の異教徒の中には、ウェルギリウスの他に、ホメロスやアリストテレスがいる¹⁵。キリスト以後の異教徒の中にはイスラム教徒の文人アヴィセンナやアヴェロエス、王サラディンがいる¹⁶。ダンテはイスラム教徒を天国にとりなそうとしていたのであろうか。

ダンテは従来、キリスト教の伝統主義者と見なされていた。しかし実は、キリスト教の伝統主義者が考えないようなことをダンテが考えていたのである。ダンテがイスラムの教祖ムハンマドに過酷な罰を科しているのは事実である¹⁷。ダンテがムハンマドは分裂を招いた予

14. Joseph Anthony Mazzeo は神学者イシドールズを引き合いに出しながら、ダンテが異教徒に天国の門を閉ざしていると説く。“Yet [Dante] may well have learned from Isidore what the eternal destiny of virtuous pagans could not be, rather than what it had to be. He finally had to deprive his ancient sages of the beatific vision, but he could save them from ancient torment because of their nobility of character, something Isidore would not have been ready to do” (*Medieval Cultural Tradition in Dante's Comedy*, p. 202).

15. “Homer, sovereign poet” (4, 88), “[Aristotle,] the master of those who know, sitting among his philosophic kindred. Eyes trained on him, all show him honor” (4, 131-33).

16. “Avicenna” (4, 143), “Averroes” (4, 144), “Saladin” (4, 129).

17. *Inferno* 28, 22-33.

言者であると考えたからである。しかし、ウェルギリウスがとりなしによって天国へ行くのであれば、そしてダンテの神が正義の神であるのであれば、同じことがリンボのイスラム教徒に当てはまらなければならない。ダンテがイスラム教徒サラディンを天国にとりなそうとしているという仮説を論じることにする¹⁸。しかし、そのためには先に、ダンテがアリストテレスを天国にとりなそうとしていることを論じなければならない。

アリストテレス

リンボの異教徒たちが天国にとりなされるとき、彼らは各自の美德によって場所を与えられる。天国に値する徳とは何か。地獄の特徴は暴力であるが、天国は非暴力の場所として特徴付けられなければならない。暴力と非暴力の峻別が、ダンテの場合、政治と宗教の分離を意味する¹⁹。政治は暴力にかかわるかもしれないが、宗教が暴力にかかわってはいけない。天国に値する徳は非暴力的でなければならないのである。

ダンテの道德の概念が問われるのが天国の第四天（太陽）である。第四天の要はトマス・アキナスである。しかし、アキナスのとなりに居るのがブラバントのシゲルスである。アキナスはシゲルスの思想を公の場で異端的であるとした。しかし、ダンテがシゲルスをアキナスのとなりに置くのは、シゲルスの異端性を否定しているということである。ダンテがアキナスの思想を絶対化しているのであれば、ありえないことである。では、ダンテは何を基準に据えているのであろうか。それがアリストテレスである。アリストテレスが基準であるからこそアキナスとシゲルスが肩を並べるのである²⁰。ダンテは道德を考える上で、アリストテレスに従う。

アリストテレスは道德の種類を区別する²¹。本論の枠組で言えば、タラントの道德が知的道德であり、ブドウの木の道德が習慣により形成される人格的道德である。前者は論理的に学習できる。しかし、後者は五感を使い学ばなければならない。喜ぶべきことを喜び、苦痛を苦痛として感じられるようにならなければならない²²。善悪の価値観は教育により教える

18. ダンテ研究者がこの種の解釈を試みるものがなかったのは何故か。研究者の多くがダンテのアレゴリーは神学的であると前提してきたからである。Charles Singleton, “The Two Kinds of Allegory” を参照。

19. ダンテの政治思想は *De Monarchia* を参照。教皇ボニファティウス 8 世が 1302 年に布告した教書 *Unam sanctam* は教皇の権力が他の現世的権力に優先すると主張する。教皇はルカの福音書の “two swords” の解釈を基に権力を “sword” と捉える。ダンテの上述書は教皇の聖書解釈を含め教皇絶対主義を論駁する (*De Monarchia*, Book 3, Chapter 9)。

20. ダンテの立場からするとアキナスもシゲルスも十分であるとは言えない。アキナスの立場は、アリストテレス（哲学）は「神学の婢」である。シゲルスはこれに対して、アリストテレス主義を貫くため、二重真理説を主張する。ダンテはどこに位置するのか。ダンテが問うのは神学ではなく信仰であり、信仰の視点からアリストテレスの道德論を参照しているのである。

21. Aristotle, *Nicomachean Ethics*, Book 1, Chapter 13, Book 2, Chapter 1.

22. *Ibid.*, Book 2, Chapter 3.

ことができるが、生死の価値観を教えることができるかどうか疑わしい。ダンテはアリストテレスの挑戦に答える。地獄を悪、天国を善として考えず、地獄を死、天国を生として考えた。善悪を学ぶことが重要であるのではない。生と死の間で人格を形成することが重要である²³。

サラディン

第四天はアリストテレスを待っているが、サラディンを待っているのは第六天（木星）である。第六天にはサラディンが天国に行く先例となる聖人がいる。正義を代表する魂の集まる鷲の中にローマ皇帝トラヤヌスがいる。トラヤヌスは異教徒であるが、天国にとりなされて来たのだ。アリストテレスは徳を性格として考える²⁴。正義が性格であれば、正義は人間性のことになる²⁵。人間性が語られて初めて正義の人であることがわかる。換言すれば、他の徳を示すエピソードが正義の徳を示すことになる。トラヤヌスの正義は寛容、謙虚を示す逸話によって示される。

There storied was the high glory of the Roman prince whose worth moved Gregory on to his great victory: I mean the Emperor Trajan. And a poor widow was at his bridle in attitude of weeping and of grief. (*Purgatorio* 10, 73-78)

トラヤヌスは異教徒であったが、優れた人間性故、死後リンボの住人となった。トラヤヌスの美德に感動した教皇グレゴリウスが彼のためにとりなしの祈りを捧げた。グレゴリオスのとりなしによってトラヤヌスは天国に行ったのである。ダンテはトラヤヌス物語を煉獄で語り、そして再び天国で語る。

The glorious soul I tell of, having returned to the flesh for a short time, believed in Him that was able to help him; and, believing, was kindled to such a fire of true love that on his second death he was worthy to come to this rejoicing. (*Paradiso* 20, 112-17)

ダンテはトラヤヌスの物語を使ってサラディンの将来を示唆する。ダンテがサラディンの

23. アリストテレスの道徳論はプラトンの道徳論の批判である。プラトンは道徳を法の認識の問題に帰する (*Republic*, esp. Book 6)。アリストテレスは極端を避け、「中庸」を求める運動を道徳であるとする (*Nicomachean Ethics*, Book 2, Chapters 2, 6, 8, 9)。

24. *Nicomachean Ethics*, Book 2.

25. *Ibid*, Book 5.

徳を示す逸話に言及することはない。しかし、サラディンがトラヤヌスに匹敵する美德の持ち主であったから、ダンテはサラディンをリンボに入れたのである。

天国の第六天ではさらに驚くべきことが判明する。正義の偉人たちの中にリペウスの名前があったのである。リペウスはウェルギリウスの作品の中の異教徒である。名前を聞いたダンテがどうしてそんなことがありえるのか “How can these things be?” (20, 82) と問うと、天国の聖人さえ誰が聖人に選ばれるのか知らないというのである。

And you mortals, keep yourselves restrained in judging; for we, who see God,
know not yet all the elect. (20, 133-35)

異教徒リペウスが天国にいるということは、作者のウェルギリウスが天国の聖人になるのも時間の問題であり、アウグスティヌス、アヴェロエス、アビチェナ、そしてサラディンが聖人に選ばれる余地があるということを意味する。

十字軍

サラディンと言えば、十字軍のリチャード獅子心王との対決で有名だ。しかし、ダンテの世界に顔を出すのはサラディンだけである。このような評価の差が生まれるのは、ダンテが十字軍をどのように考えているからであろうか。

天国には暴力にかかわる場所がある。第五天（火星）でダンテを迎えるのが十字軍の殉教者であるカッチャグイダである。キリスト教は非暴力が前提であるが、現実主義の立場から正戦論が唱えられてきた。アキナスは正戦の条件を正しき権威、理由、意図、方法であると列挙した²⁶。ダンテの祖先カッチャグイダが参加した十字軍はアキナスの条件を満たすのであろうか。彼は自分が参戦した十字軍の成否を語りはしない。ただ、彼は現在のフィレンツェの腐敗を嘆く。ダンテはカッチャグイダから話を引き継ぎ、教皇を痛烈に批判する²⁷。十字軍が正戦の条件を満たすことがなかったと思わざるを得ない。

カッチャグイダが紹介する戦士の多くはイスラムと戦ったが、彼らの中に反イスラムの思想が見当たらない (18, 43-8)。武勲詩 *Chanson de Roland* の英雄シャルルマーニュとローランはイベリア半島のスルタンと戦ったが、物語の中では悪者はキリスト教徒の中にいた。オランジュのギヨームも武勲詩の英雄であるが、相棒のルヌアールは、後に改宗するが、元々

26. St. Thomas Aquinas, *Summa Theologica*, Part II-II, Question 40, esp. Article 1 and 3.

27. 教会には教皇権拡大のための聖戦論という思想があった。教皇がキリスト教帝国を皇帝に代わり統治するためには聖戦が必要になるという考え方である。ダンテはこの思想を表明した教皇ボニファティウス8世を地獄に落としている。 *Inferno* 19, 52-57 を参照。

はイスラム教徒であった。ブイヨンのゴッドフロワとロベール・ギスカールは同時代人であるが、前者は皇帝ハインリヒ4世が教皇グレゴリウス7世を追いつめるのを助け、後者は追いつめられた教皇を皇帝の手から救い出した。ギスカールは南イタリアでゴッドフロワのようにイスラム教徒と戦った²⁸。

第五天の聖人たちが聖人に選ばれている理由は何であろうか。彼らの人間性をどのように評価したら良いのか。第五天は抑制を通して暴力を超越する重要性を訴えている。ダンテは自分を追放したフィレンツェを憎んでいる。しかし、カッチャグイダは昔のフィレンツェを述懐して言う。

With these families, and with others with them, I saw Florence in such repose that she had no cause for wailing. With these families I saw her people so glorious and so just, that the lily was never set reversed upon the staff, nor made vermilion by division. (16, 148-54)

昔のフィレンツェを知るからこそ、現在のフィレンツェに対する感情を制御することができるのである。これは平和を信じなければ、暴力に歯止めがかからないのと同じである。ダンテは暴力が暴力を解消するという考えを否定しているのである。

十字軍が熱狂の中から生まれたことは知られている。クレルボアのベルナルドゥスが教皇の意向に従い、十字軍を唱えたとき、聴衆は熱狂した。フランスでは、聴衆の中にリチャード獅子心王の母になるアリエノール・ダキテーヌ（当時フランス王妃）も含まれていた。ドイツでは、カッチャグイダと一緒に戦うコンラート3世がベルナルドゥスに十字軍参加を表明した。彼らが熱狂したものは何だったのか。ヨーロッパは内部に対立を抱えていた。第1回十字軍の提唱者ウルバヌス2世は内部の対立は外部の対立によって解消されると説いた²⁹。第2回十字軍の提唱者ベルナルドゥスも同じレトリックを使った。しかし実際は、内部の対立はますます激しくなった。暴力が暴力を解消することはなかったのである。

信仰の再定義

なぜダンテは旅の最後の最後でベルナルドゥスをガイドに選んだのか。ダンテはベルナル

28. *Ibid.*, 28, 13-4.

29. クレルモン教会会議の場でのウルバヌス2世の十字軍宣言を参照。たとえば、“Now, let those, who until recently existed as plunderers, be soldiers of Christ; now, let those, who formerly contended against brothers and relations, rightly fight barbarians; now, let those, who recently were hired for a few pieces of silver, win their eternal reward.... Nay, more, the sorrowful here will be glad there, the poor here will be rich there, and the enemies of the Lord here will be His friends there (Fulcher of Chartres, p. 53).”

ドゥスを通してキリスト教の信仰を再定義しようとしている。ベルナルドゥスは自らが唱えた十字軍が失敗すると、教皇権と皇帝権の分離を唱え、教皇の世俗の対立への関与を否定した。ダンテがそのように解釈するのに根拠がないわけではない。“L'enfer est plein de bonnes volontés et désirs.”という格言は晩年のベルナルドゥスのことばが出典であると言われている³⁰。善意だけ、信仰だけでは駄目だということである。マルティン・ルターはベルナルドゥスを尊敬していた³¹。ルターがベルナルドゥスの信仰のみ (sola fide) の思想に感銘したからである。しかし実は、ダンテは逆に、ベルナルドゥスに善意だけでは不十分であるというメッセージを託している。ダンテは最後のガイドが信仰の対象に何を選んだのか明確にしている。それは異教徒のとりなしに関与する聖母マリアを中心とする至高天の道徳、慈愛である。ルターの信仰義認 (信仰のみ) の裏に禁欲主義があると考えられるが、ダンテのベルナルドゥスは禁欲主義者ではない。彼は聖母マリアを通して地上への関与を恐れない聖人として描かれている。

キリスト教の護教詩人と見られるダンテが実は、キリスト教の枠を超える平和のヴィジョンを描いていた。キリストの教義は暴力を否定する。しかし、原理主義者はキリストの教義を飛び越え、新約から旧約にさかのぼる。旧約は暴力を正当化しえるからだ。実際、キリスト教の歴史は分裂の歴史である。ダンテはムハンマドが宗教対立の種を蒔き、アリがイスラム内部の宗派對立の種を蒔いたと考えた³²。ダンテのムハンマドはダンテの同時代人フラ・ドルチーノに同情を示す³³。フラ・ドルチーノは教会改革者であったが、原理主義者であり、暴力を肯定する。ドルチーノ派は教皇の十字軍によって弾圧される。「すべて剣を取るものは剣にて滅ぶ」である³⁴。ダンテが問うのは、キリスト教徒であれ、イスラム教徒であれ、暴力を唱えるか、非暴力を唱えるか、戦争を唱えるか、平和を唱えるか、分裂を唱えるか、一致を唱えるかである。

結論にかえて

キリスト教の中には2つのメンタリティの葛藤がある。善悪と歴史を優先するメンタリティと生死と自然を優先するメンタリティである。歴史が勝者の歴史である限り、前者が語り継がれていく。後者を語り継ぐのは詩人である。もちろん、詩人の中にもミルトンあるいはダンテの地獄に顔を出す吟遊詩人ベルトラン・ド・ボルンのように神の戦士を自負する者もいる³⁵。

30. Christine Ammer, *The American Heritage Dictionary of Idioms*, p. 542.

31. Franz Posset, *The Real Luther: A Friar at Erfurt and Wittenberg* を参照。

32. *Inferno* 28, 28-36

33. *Ibid.*, 55-63.

34. マタイ福音書 26 章 52 節。

35. *Inferno* 28, 118-142.

詩人は若いとき、往々にして自己を戦士と同一化する。しかし、ダンテのように「人生の道半ばで」“Nel mezzo del cammin di nostra vita” (*Inferno* 1, 1)、もう一度自己を問い直し、生き方を変えることもある。W.B. Yeats (1865-1939) はそのような詩人であった。彼は自分の心の遍歴を最晩年の詩“Cuchulain Comforted” (1939) で描いている。善悪を力で決める世界で最強の英雄になったクーフランは、無敵を誇り、数多くの強者を殺してきた。彼に父を殺された強者たちが復讐を画策すると、実直な性格のクーフランは、彼らの計略にはまり、最後は力尽き殺され、首を切られてしまう。ここからが詩の内容になるが、死後、最強の男は臆病者の魂たちに囲まれ、鳥のように歌っているという。

“Now must we sing and sing the best we can,
But first you must be told our character:
Convicted cowards all, by kindred slain

“Or driven from home and left to die in fear.”
They sang, but had nor human tunes nor words,
Though all was done in common as before;

They had changed their throats and had the throats of birds.

思想史家 Ernst Robert Curtius はプロテスタントの出身であるが、ヨーロッパ文学をカトリック的に考えた。クルティウスの *European Literature and the Latin Middle Ages* (1948) はヨーロッパ文学の伝統的トポスを探求することで、中世と近世の連続性を主張する。中世と近世の連続性の鍵を成すのがダンテである。本論が正しければ、しかし、ダンテはヨーロッパ文学の枠組を超えるカトリック以上のカトリックであった。

参考文献

- Alighieri, Dante. *De Monarchia*. Translated by Richard Kay. Toronto: Pontifical Institute of Medieval Studies, 1998.
- Alighieri, Dante. *The Divine Comedy, Inferno: Text and Commentary*. Translated and with commentary by Charles Singleton. Princeton: Princeton University Press, 1970.
- Alighieri, Dante. *The Divine Comedy, Purgatorio: Text and Commentary*. Translated and with commentary by Charles Singleton. Princeton: Princeton University Press, 1973.
- Alighieri, Dante. *The Divine Comedy, Paradiso: Text and Commentary*. Translated and with commentary by Charles Singleton. Princeton: Princeton University Press, 1975.

- Ammer, Christine. *The American Heritage Dictionary of Idioms*, 2nd ed. Kindle Edition. 2013.
- Aquinas, St. Thomas. *Summa Theologica*. Kindle edition. Coyote Canyon Press, 2010.
- Aristotle. *Nicomachean Ethics*. Translated and with an interpretive essay, notes and glossary by Robert Bartlett and Susan Collins. Chicago and London: University of Chicago Press, 2011.
- Curtius, Ernst Robert, *European Literature and the Latin Middle Ages*. Translated by Willard R. Trask. Princeton: Princeton University Press, 1973.
- Fulcher of Chartres. “The Chronicle of Fulcher of Chartres, Book I (1095-1100).” Translated with notes by Martha E. McGinty. *The First Crusade: The Chronicle of Fulcher of Chartres and Other Source Materials*. 2nd ed. Edited by Edward Peters. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1998. 47-101.
- Le Goff, Jacques. *The Birth of Purgatory*. Translated by Arthur Goldhammer. London: Scolar Press, 1984.
- Mazzeo Joseph Anthony. *Medieval Cultural Tradition in Dante’s “Comedy.”* Ithaca: Cornell University Press, 1960.
- Milton, John. *The Poetry of John Milton*. Edited by Jonathan Goldberg. Oxford: Oxford University Press, 1991.
- Plato. *Republic*. Translated by Robin Waterfield. Oxford and New York: Oxford University Press, Oxford World’s Classics, 1998.
- Posset, Franz. *The Real Luther: A Friar at Erfurt and Wittenberg: Exploring Luther’s Life with Melancthon as Guide*. St Louis: Concordia. 2011.
- Pound, Ezra. *The Spirit of Romance*. Revised edition. London: Peter Owen, 1952.
- Randall, Willard Sterne. *A Little Revenge: Benjamin Franklin & His Son*. Boston: Little, Brown & Co, 1984.
- Schildgen, Brenda Deen. “Dante and the Crusades.” *Dante Studies, with the Annual Report of the Dante Society* 116. 1998. 95-125.
- Singleton, Charles. “Two Kinds of Allegory.” *Dante*. Edited by Harold Bloom. Modern Critical Views. New York: Chelsea House, 1986. 11-19.
- Weber, Max. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Translated by Talcott Parsons. With an introduction by Anthony Giddens. Taylor & Francis e-Library, 2005.
- Yeats, W. B. *The Collected Poems of W. B. Yeats*. Edited by Richard J. Finneran. New York: Macmillan, 1989.

